修士論文（要旨）
2009 年 2 月

移行対象が青年期の友人関係に及ぼす影響

指導　橋本泰子　教授

国際学研究科
人間科学専攻
臨床心理学専修
207 j 5021
山本美知子

目次

はじめに・・1
第１章　幼児期の移行対象
　　１　移行対象（Winnicott,D.W.）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　　２　Bowlby,J.M.・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第２章　青年期
　　１　青年期の定義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　　２　青年期の発達課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　　３　青年期の友人関係・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
第３章　問題と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第４章　方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第５章　結果
　　１　移行対象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
　　２　質問紙・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
　　３　星と波テスト
　　１）星と波テストと移行対象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
　　2)　ローデータによる分析　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第６章考察
　　１　移行対象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
　　２　移行対象と母子関係　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
　　３　移行対象と友人関係・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
　　４　星と波テスト　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
　　５　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
　　６　今後の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
謝辞　・・・33
参考引用文献
資料

問題と目的

近年、若者の人間関係のあり方が大きく変化したという指摘がある。栗原（1989　小塩,2004 から引用）は、ナルシシズム的で自己中心的な関係であると指摘している。久保田（1995）は、青年期の発達課題として友人とのアタッチメント関係の再構成をあげている。

移行対象とはウィニコット（1953　猪俣訳,1985）により用いられた言葉で、乳幼児が肌身離さず持ち歩き特別な愛着を寄せる自分でない所有物（毛布やタオルケット、ぬいぐるみなど）を指している。移行対象の心理的意味の一つとして正常な情緒発達における自立への第１歩であり、就眠時や母親が留守の時など分離場面で必要とされ、分離不安、抑うつ不安の防衛として用いられることをウィニコットは挙げている。ルーディ（1987　遠藤,2000 から引用）は、16～17 歳では他者との社会的関係において活発に共感し、移行対象を所持していた方が他者への親密さのニーズが高いと指摘している。

近年、問題視されているひきこもりやフリーターの原因として、若者の人間関係のあり方が大きく変化したという指摘や、核家族化、少子化、過保護との指摘があり、乳幼児期の家族関係が関連しているのではないかと考えられる。また、移行対象が青年期の社会適応の基盤と指摘されていることからひきこもりやフリーターの問題とも関係があると考えられる。本研究では、青年期の友人関係を中心に幼児期の移行対象がどのような影響を及ぼしているのかについて検討していくことを目的とする。

方法

調査対象者：東京都・神奈川県の四年制大学に在籍する大学生 208 名（男性 91 名、女性 117 名、平均年齢 20.0 歳、SD1.90）。

調査方法：集団法にて実施。四つの質問紙と描画法の用紙からなる小冊子を配布し回答を求めた。実施期間は２００８年１月であった。

①　フェイスシート（学年、年齢、性別、家族構成）。

②友人関係尺度

岡田（1993）による現代青年における友人関係を捉えるために友人との関わりを測定する尺度を用いた。全 17 項目から成り立ち、４件法で回答を求めた。

③就学前の母子関係尺度

酒井（2001）が就学前の母子関係を回想させるために作成した尺度である。全 16 項目から成り立ち、６件法で回答を求めた。

④移行対象に関する質問

移行対象の有無、種類（毛布、タオル、ハンカチ、ぬいぐるみ、人形、枕、その他）、時期、名前の有無について質問を行った。

⑤星と波テスト

星と波テストはドイツの心理学者ウルスラ＝アヴェラルマンによって開発された投影描画法テストである。教示は、「鉛筆で、海の波の上に星空を描いてください」と与えた。

結果

移行対象の発現率は、69 名 33.2%という結果であった。男女差では、男性 20 名 21.9%、女性 49 名 41.8%という結果となった。 移行対象を所持していた年齢は、3歳～5歳で 63.7%と集中している結果となった。

移行対象の有無により母子関係尺度の得点を比較するため、SPSS を用い、t検定を行った。男性のt検定の結果、アンビバレントな母子関係において移行対象無しよりも有りの方が、有意に高かった($t=(89)=2.24, p<.05$)。女性の移行対象の有無による母子関係尺度得点の t 検定の結果、有意な差は認められなかった。

移行対象の有無により友人関係尺度の得点を比較するため、SPSSを用い、t検定を行った。男女の移行対象の有無による友人関係尺度得点のt検定の結果、有意な差は認められなかった。

男女の移行対象の有無による星と波テストを比較するため、SPSSを用い、χ^2検定を行った。星と波テストでは、男女共に砂浜に有意差が認められた。男性($\chi^2[1]=9.814 p<.01$)、女性($\chi^2[1]=12.791 p<.001$)。他の項目では、有意差は認められなかった。

考察

移行対象の本調査では、移行対象の発現率、男女差などこれまでの研究と近似した結果となった。移行対象の有無と母子関係はなんらかの関係があると考えられ、男性の移行対象有では、無しに比べ母子関係がアンビバレントであったことが考えられる。女性よりも男性の方が、母子関係において関係があると考えられる。移行対象と友人関係において、質問紙による尺度では結果が得られなかった。

今回、尺度だけではなく投影法を用いた。星と波テストでは、男女ともに砂浜で有意差が認められた。砂浜は、防衛を表しているとされている（ウルスラ・アヴェラルマン, 2003 小野訳, 2003：桜井, 2007：橋本, 2008）。この結果から、移行対象有りの方が無しに比べて、防衛が強いことが本研究から考えられる。このことは、防衛的であるがゆえに深い親友と呼ばれる友だちを作りにくい友人関係が考えられる。千石（1985　小塩, 2004 から引用）は、現代青年の特徴として、互いに傷つけることを恐れ相手から一歩身を引いたこところでしか関わろうとしないことなどを挙げているが、ここから深く友情関係を築いても傷つくのが怖いという考えがあることが考察される。今後の課題として、被検者が、移行対象を所持していたと思われる時点からかなりの時間が経過しており、記憶が不鮮明な場合も考えられる。被検者が、少なく群わけなどをすると結果に偏りが見られてしまった。今後は、被検者を増やすことで、星と波テストでは、更に細かく分析し、多角的に見ることが出来ると考えられる。

引用・参考文献

安部哲郎　2006　乳幼児期の移行対象が青年期の自己愛傾向に及ぼす影響　法政大学大学院人間科学研究科
馬場禮子・永井徹　1997　ライフサイクルの心理学　培風館
ボウルビィ著　庄司順一著　1993　母と子のアタッチメント：心の安全基地　医歯薬出版
(A　secure base:clinical applications of attachment theory)
D.W ウィニコット著　猪俣丈二訳　1985　子どもと家族とまわりの世界・赤ちゃんはなぜ泣くの　ウィニコット博士の育児講義　星和書店（The　child, the family, and the outside world)
遠藤利彦　1995　青年期の心理と友人関係青少年問題　第 42 巻(1)18-24
遠藤由美　2000　青年の心理　サイエンス社
橋本泰子　2008　対人関係のスキルアップ研究
藤巻英徳　2005　乳幼児期の移行対象と青年期における自立　法政大学大学院人間社会研究科紀要 1
子安増生・二宮克美　2004　発達心理学　新曜社
栗原彬　1985　青年におけるモラトリアムの意味　日本社会教育学会紀要第 21 巻　1-2
黒川嘉子　2004　移行対象・移行現象に関する二つの視点　心理臨床学研究 22(3)285-296
町沢静夫　2001　自分を消したいこの国の子どもたち　PHP
宮下一博　1995　青年期の同世代関係　講座生涯発達心理学　第4巻　155-184
中島義明　1999　心理学辞典　有斐閣
西平直喜　1997　青年心理学研究における問いの構造　青年心理学研究第9巻 31-39
落合良行・伊藤裕子・斎藤誠一　1998　青年の心理学　有斐閣
岡田努　1993　現代青年の友人に関する考察　青年心理学研究第 5 巻　43-55
大平英樹　1989　自己愛人格と家族関係に対する実証的研究　家族心理学研究第3巻　1-10
小塩真司　2004　自己愛の青年心理学　ナカニシヤ出版
斉藤誠一　1996　青年期の人間関係　人間関係の発達心理学4　培風館
桜井真澄　2007　心を映す鏡の世界へクリエイテェブ・セラピー入門こころが安らぐ不思議とは　悠書館
酒井厚　2001　青年期の愛着関係と就学前の母子関係―内的作業モデル尺度作成の試み　性格心理学研究第9巻(2)59－70
関口愛・吉川佳余　2002　他者意識の違いによる青年期の友人関係について　明治学院大学文学研究科心理学専攻紀要　19-33
ウルスラ・アヴェラルマン著　小野留美子訳　2003　星と波テスト　川島書店
(DerSterne-Wellen-Test)
吉田富士雄編　2001　心理尺度集(2)　人間と社会のつながりをとらえる対人関係・価値観　サイエンス社